

三陸の海を放射能から守る 岩手の会 (略称) 三陸の海・岩手の会

郵便振替 02240-5-102650

ホームページ [再処理/岩手の環境/RI](http://www.sanriku-no-umi.jp)

廃棄物 (coocan.jp)

本紙は市民カンパで発行しています。
購読したい方は事務局に連絡下さい

止めよう! 《再処理》

《天恵の海》

2026(令和 八年)

1月11日

第268号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

アクティブ試験は終わってない

竣工は暴挙だ

六ヶ所村の再処理工場



青森・岩手の四市民団体が、日本原燃へ提出した六ヶ所再処理工場の安全性を問う公開質問書への回答書が到着し、その質疑・意見交換説明会が六ヶ所村で開催されました。六ヶ所再処理工場に液体状態で貯蔵されている「高レベル放射性廃液」は、万が一、環境に放出されれば、地球規模の放射能汚染を引き起こす超危険物です。私たちは一月二十七日、六ヶ所村まで出かけ説明を聞きました。しかし、その内容は、疑問だらけで納得出来ないものでした。そしてその一日後に、Mw7.5の青森東方沖地震が発生し六ヶ所再処理工場は激しく揺さぶられました。

今こそ全面 撤退の時

二十年経ってもアクティブ試験、 失敗を認めよ!

質問1
継続中のアクティブ試験は失敗だったのではないか?

原燃回答書(要点)

ガラス固化に関わる試験が残っているが、使用前事業者検査として実施し、確認証の受領をもって完了。その後溶液、廃液処理運転を実施した上で再処理工場を稼働する計画である。アクティブ試験報告書のガラス固化に関しては、検査前に実施した試験項目では確認事項を満足し終了している。製品の回収率は第4ステップでの試験で、使用済み燃料は4480kg処理、プルトニウムもウランも目標の98.2%を回収した。

市民団体コメント

高レベル廃液のガラス固化は失敗だった
◎国と原燃は、ガラス固

化試験をアクティブ試験では、PWR(加圧水型原燃)の高レベル実廃液は終了したが、BWR(沸騰水型原燃)の実廃液の性能試験はまだ行われていないまま竣工とし、その後本格操業前に実廃液でいくらかのガラス固化体を作り貯槽の容量を得ようとしている。その後使用済み核燃料のせん断を開始とする予定のようだ。使用済み核燃料による総合試験であるアクティブ試験を完了し報告書が審査されないままの竣工はあってはならない。

◎回収率の回答は処理全量425トンのうち約4.5トンのみでの回収率であり全体の回収率を問うたのに回答していない。原燃の定期報告書からの試算ではウラン91%、プルトニウム78%の回収率であり目標から程遠い値であった。

◎質問書でアクティブ試験は6つの理由で失敗だったとしたが、回答書には全く見解が示されていない。

失敗とする6つの理由(質問書から再掲)

1. 着工から32年、いまだに完成せず
2. プルトニウム、ウランの回収率悪い
3. 高レベル廃液のガラス固化進まず
4. トリチウム、クリプトン、ヨウ素等の放射性物質の環境への大量の放出
5. 累積総事業費15兆円越え
6. 装置機器の腐食、放射能汚染、耐震不可

質問2

使用前検査と高レベル廃液のガラス固化について

原燃回答書(要点)

現在保有の高レベル廃液は2025年3月末で227m³せん断を行う前に、全量あるいは一部を処理する計画で、ガラス溶融炉検査を含めて原子力規制委員会が確認証を発行し適合確認する。

市民側再質問など

超危険な高レベル放射性廃液は水泳プール1

杯分

◎高レベル放射性廃液は、電源喪失で沸騰乾固後約350℃で、化学爆発し、ウラン、プルトニウム、ストロンチウム、セシウムなど超ウラン

元素が飛散し、汚染地域は人の住めない危険な地帯となる。六ヶ所工場のガラス固化溶融炉性能試験を完了せずに工場を動かしてよい道理はない。

◎ガラス溶融炉の「白金族沈潜問題」は解決したのか？ 現有A系の炉の天井レンガ剥離状態で運転できるのか？既に提出されているPWR廃液のガラス溶融炉の報告書の審査はどうなっているのか？

質問3

内閣府想定定の日本海溝巨大地震と再処理工場の耐震について

原燃回答書(要点)

当社の地震動評価は日本海溝・千島海溝の評価から強振動を発生させる領域を重視し設定している。東日本大震災

時の震度は地表における振れを示しているが地下深く硬質の岩盤で策定された基準地震動と地表とは単純に比較できない。

市民側再質問など

想定地震のエネルギー規模について日本原燃予測は内閣府予測より3割低い

◎青森県の90km沖地点の想定地震規模について、内閣府の専門家の集団はMw9.1と算定した。一方、日本原燃はMw9.0と算定し、原子力規制委員会はそれを認めた。エネルギーが3割低い。さらに地震動計算モデルが両者で異なっている。日本原燃は巨大地震時の敷地の入力地震動を200ガルとしている。実測では地下の基盤表面の加速度と地表の加速度とは極端な相違はなかった。明らかに、過小評価であろう。

質問4

高レベル放射性廃液事故について、

我が国の再処理規則では、「蒸発乾固が重大事故」と書かれているがIAEA規則では、「大容量液体貯槽の破裂」とある。そして我が国の規則では、蒸発乾固後の硝酸塩爆発までの想定がない。なぜか？

原燃回答書

我が国はIAEAの定める基準に従って再処理施設は、「施設外で重篤な確定的影響を生じさせる恐れのない」施設としている。高レベル廃液が電源喪失しても反応温度に達するには、1週間以上の余裕がありその間に冷却機能を復旧出来る。

市民側再質問など

蒸発乾固後の「硝酸塩爆発」は、脅威が大きく被害甚大である。

◎硝酸塩爆発までの「1週間」の根拠が示されず大地震などで工場の受ける諸設備の破損による強烈な放射能漏洩について言及がない。

人が近づけなければ1週間はたちまち経ち硝酸塩爆発が現実になる。

原燃回答書と「質疑意見交換会」



青森の山田清彦さんから、現在設工認審査を60数箇条にわたって、原燃側からの審査書を逐一審査しているが、その進捗は極めて遅い。このままでは、現在原燃が提示した二〇二六年度三月中の審査終了は難しい。しかし安全審査は厳重に手抜きなく行うべきである、としました。

回答書への質疑意見交換会は一月二七日、六ヶ所村の原燃ふれあいプラザにおいて開催されました。

冒頭に「六ヶ所村の新しい風」遠藤順子共同代表から「六ヶ所の自然をそのまま生かし新しい村づくりを目指す市民団体」の私達と、再処理工場側との質疑を深めたい、とする挨拶がありました。

会には、青森から4人、岩手から9人が出席し、日本原燃からは、同社広報部グループリーダーの館花氏が出席しました。

六ヶ所村の新しい風

2250913 遠藤街宣 U チューブ動



「再処理工場ストップ」カレンダーから

最終報告の提出と審査が未定である件やガラス溶融炉の白金族による炉底の詰まり、廃液の化学爆発の恐れ、日本海溝地震の耐震について、説明を求めました。説明不足を認めて「会社幹部に伝えます」と答えた場面もありました。今後国会議員による質問主意書や委員会審議によって質すことが大事であると市民側は認識しました。

原燃側も規制委員会の設工認書類審査が滞り、「28回目の稼働延期」も現実にならざるを得ないと思われそうですが、竣工の動きには油断できません。